人格の二面性についての一考察

——被験者の内省報告を手がかりとして——

森　　知　子

On the "Two-sidedness of Personality"

——An Analysis of the introspective Reports——

MORI Tomoko

人格は，様々な相反する体系や矛盾を内包しつつ，なおかつ一個のまとまりを有するという複雑な存在である。人格が統合性を保っているということは，侵し難い大前提であるが，しかしそれは決して静的，図式的なものではなく，様々なバランスやダイナミクスの上に成り立っていると考えられる。筆者はこういった観点から，人格の内に存在すると考えられる対極的な側面に注目し，さらにはそれを"質問紙法"という数量化の可能な方法によって測定することを試みてきた。本論文においては，まず，これまでの研究を概観したのち，これとは異なった方向からのアプローチを試みることによって，基礎となるべき理論を探究し，考察を深めることを目的として論を進めていきたい。

1. これまでの研究について

①既存の類似概念

上に述べたような，人格内の対極的な側面を，筆者は"人格の二面性"と呼ぶ。この対極的な2側面は，統合性を旨とする人格にとっては普通（特に意識内においては）共存させにくいものであると考えられる。

さて，この"人格の二面性"について，その定義を明確にするために，既存の概念の中で"二面性"と似通っていると考えられる事柄をあげて，それを検討してみたい。

ⓐ二元性: 近代経験科学の出発点は Descartes の二元論だといわれるが，たとえば，心身論においては，心と身体を独立した別個の実体ととらえるといった，対立して，しかも統一されることのない二者から事物を説明しようとするものである。そもそも，人格という1つの統一体の中で，相互に関連をもたない実体が存在しうるものだろうか。対立する二者というとらえ方は共通しているものの，"二面性"とはかなり異なった概念と考えられる。

ⓑアンビヴァレンス：同一の対象に対して，愛と憎しみ，友好的態度と敵対的態度のような，相反する心的傾向・感情・態度が同時に存在する精神状態をいう。最初にこの言葉を用いたのは E. Bleuler (1911) で，普通"両価性"と訳されている。これは，分裂病の基本症状として Bleuler によって示されたのであるが，正常人においても，正常なアンビヴァレンスが心理機構の中で大きな意味をもち，心的に対立する力の平衡をつくり出すことによって，より微妙な調節をあやつ

ることになるとしている。一方，Jung (1921) は，“Archaismus (原始性)” の定義の中で，‘ブロイラーのいう Ambivalenz, すなわち，たとえば感情と反対感情というように，反対物がとけあっている状態は原始的である’としており，アンビヴァレンスの特徴として，原始的，未分化な状態であることがあげられるかもしれない。

ⓒオモテとウラ：土居 (1976) は，非常に日常的でありかつ日本的である“オモテとウラ”という語を用いて，精神内構造を語る試みを行なっている。彼のいう“オモテとウラ”は“タテマエとホンネ”の関係と同様であり，日本人がアンビヴァレンスをさばく社会的方式として身につけたものとしている。彼はさらに，このことばによって，精神病理を類型化するという試みも行なっている。これは，“オモテとウラ”の成立が自我機能の分化と統合を意味し，オモテが現実適応に，そしてウラが本能防衛に関係しているために，この2つの概念によって精神内部の全過程を代表させることができるという論拠によっている。やや図式的なきらいはあると思われるが，人格内における一見相反する二者の存在，そしてそのことの重要性，及びその二者が互いに相補う関係にあるという指摘には，本論でいうところの“二面性”との共通性が認められる。しかし，“二面性”すなわち“オモテとウラ”であるとはいえず，はなはだ示唆的ではあるが，これをもって“二面性”といいかえることは不可能であると考えられる。

ⓓ補償：A. Adler 及び C. G. Jung それぞれによって，独自の意味をもって用いられた心的機制の概念である。まず Adler は，人間行動の究極的動因を権力への意志に求めたが，人生とは，それぞれのもつ劣等感を克服する補償の努力の形でこの権力意志を実現していく過程であるとしており，従って，彼のいう補償の本質は，劣等性のおぎないをつけるような1つの虚構を作りだす点にある。これに対して Jung は，人間の心は意識と無意識の相補性（両者間の補償作用）によって全体的な均衡・調和を保つとしており，Adler が劣等感の補償の場合に限って使用している“補償”という概念を，心的器官の自己調節作用のすべてを指すことばとして用いている。さて，これらの見解により，人格内には否定することのできない一種の補償機能が存在しているであろうこと，及び，意識と無意識の相補作用という形をとって“二面性”が成りたっている可能性が示唆される。従って“二面性”の成立にあたって，補償は，見逃すことのできない機制であると考えられる。

以上，“二面性”と似通っていると考えられる事柄について検討を加えてきたわけであるが，これらの概念のみで“二面性”を説明することは不可能であり，“二面性”について，新たな考察を必要とするものと思われる。

②“二面性”についての人格理論

人格理論は数限りなくあるが，その中で，“二面性”ということに焦点づけをしているものはほとんどないといってよい。これはいかなる理由によるものであろうか。後にも述べるが，人格の統合性，特に意識におけるそれは，何事にもかえ難く重要な点であって，普通，意識というのは一面的であるといえる。従って，そこに“二面性”という考えを導入することは，ある種の“危険”を伴なうことですらあり，そのことは排除される傾向があるのではないだろうか。しかし，意識にうかぶ様々の要素は，それらと対立する無意識内の要素と深くかかわっているのである。そのかかわりを無視するなら，——Jung の言葉を借りれば‘意識的根本態度を修正する自己規制的，補償的機能がプシュケーの中に存在しないと仮定したならば’——‘やがて意識の平

衡は完全に失われてしまうことであろう。'

Jung 以外にも，“二面性”について述べている理論は散見される。たとえば，Maslow (1962) は，'人間成熟の高い水準にあっては，多くの二分法・両極法・葛藤は融合し，超越し解決せられる'としており，日本においても，岡本 (1962) は'人間は，種々様々の二元対立や矛盾を含む多元統一体である'とし，また上田 (1969) は，精神的に健康な人格の構造論的特質として'互いに著しく相反する特性の共存と統一のうえに成立する'ことをあげている。ただ，残念なことに，これらは全体としてやや抽象的な論に留まっている感があるが。

③測定分野における“二面性”に対する観点

Jung は，人間の一般的態度について外向と内向という2タイプを提唱しているが，すでに述べたような観点により，'人間の中にはこれら二つの態度がともに存在し，ただ，相対的な優越の度合が人によって違っている'としている。しかしながら，Jung 理論に基づくとされる向性検査では，外向と内向とは二律排反の関係にあり，“二面性”の観点が導入されていない。ただ，ロールシャッハテストにおいては，Rorschach (1921) の'内向と外向とを生ずる心理的過程は対立的ではなく差異的である'との考えを反映して，“両拡型”あるいは“両貧型”と名づけられたタイプが設けられており，そこでは，外向と内向とが二律排反の関係になっていない。また，人間の中の対立のうちの1つである男性性・女性性について，Weininger, D. (1924) や Apfelbach, H. (1924) は考察を加え，一個人内に男性性格・女性性格の両者を有すると述べているが，最近アメリカで盛んに研究が行なわれている Psychological Androgyny（心理学的両性具有性）は，そういった観点に立つものと考えられる。Bem (1974) は，男性性・女性性を独立な次元としてとらえた BSRI (Bem Sex—Role Inventory) を作成しているが，これは，“二面性”の一つである男性性・女性性に対して，初めてそれらを独立な次元としてとらえようとした質問紙法によるアプローチである。

④ TSPS について

筆者は，これまで見すごされてきたと考えられる人格の二面性について，質問紙法でのアプローチを試みることにした。(森 1983) そこでは，従来の方式では抽出することのできなかった“二面性”について，その存在を確認することができた。すなわち，人格内における相反するものが，互いに二律排反の関係にあるのではなく，共存していることが認められ，“二面性”に対する焦点づけの意義もまた確認された。

ところで，“二面性”が質問紙法によって，数値によって示されたという点について，少し考えてみたい。

Jung (1921) は，意識と無意識とが補償的な関係にあると述べており，従って，人格の“二面性”についても，一方が意識内にある時には，他方は無意識の内にあるということになる。しかし，筆者の用いた質問紙法という主に意識内をさぐる試みによっても“二面性”の存在は確認されたわけで，これは，意識だけをとりあげた時にもその中に“二面性”を認めうることを示すだろう。ただ，Jung (1921) は，また別の部分では以下のように述べている。'無意識を発掘するにはいわば深層ボーリングのような困難な作業が必要なのだなどと考えるのはとんでもない見当違いである。事実はこれと逆で，無意識は意識的な心理過程に絶えず流入しており，しかもその結果，ある人間の性格のうちどれが意識的な人格のものでどれが無意識的な人格のもの

であるか往々にして判別がつかないこともあるほどなのだ。’従って，意識と無意識について完全に切り離したとらえ方をすると誤りをおかすことになるかもしれない。また，筆者の実施した質問紙は SD 法（Semantic Differential 法）に類似した形式を採用しており，その意味で，意識内においてもやや無意識的な，いわば“前意識”の部分についてとらえたということもいえるかもしれない。

さて，次に，筆者の作成した質問紙について簡単に述べる。これは Fig. 1 に示すような測定形式をもっており，これによると，相反する形容詞対に対して，独立に評定できる。したがって，例に示しているように，“やさしい”に対して“かなりあてはまる”，“きびしい”に対して“少しあてはまる”といった評点のつけ方が可能となっている[1]。“二面性”を測るスコアとしては，左右の対の評定点についてその差の絶対値をとり，（Fig. 1 の例の場合 $|5-4|=1$）それを，この質問紙を構成する30対について合計したものとしている（これを S_- とよぶ）。また，30対60項目の評定点を合計したスコア（これを S_+ とよぶ）も設けてある。この質問紙は TSPS（Two-Sided Personality Scale）と名づけられたが，これはまた，すべての項目が望ましい意味をもつ語（以下Pと略）であるという特徴をもっている。筆者はその後 TSPS に，望ましくない意味をもつ語（以下Nと略）の対をつけ加えた（桑原 1981a）。こうして，望ましい意味をもつ語どうし，あるいは，望ましくない意味をもつ語どうしの対，それぞれ30対計60対から成る TSPS が作成された。P の対，N の対は，たとえば‘口数少ない—話し好きな’（P）‘むっつりした—おしゃべり’（N）：‘てきぱきした—おっとりした’（P）‘せかせかした—ぐずぐずした’（N）といった具合に，それぞれ無関係ではなく，同じ意味の事を望ましい言い方と望ましくない言い方の両面からいいかえたものになっている。Pの対，Nの対はランダムに配列されており，スコアは，PとNそれぞれについて算出される。筆者は TSPS を大学生に実施し基礎データを収集し，さらに，他テストとの比較等によって“二面性”に対するアプローチを試みてきた。その結果，先にも述べたように，質問紙法によって人格の“二面性”の抽出が可能なことが確認され，また，“二面性”をもつ人格についてのいくつかの情報も得られた[2]。

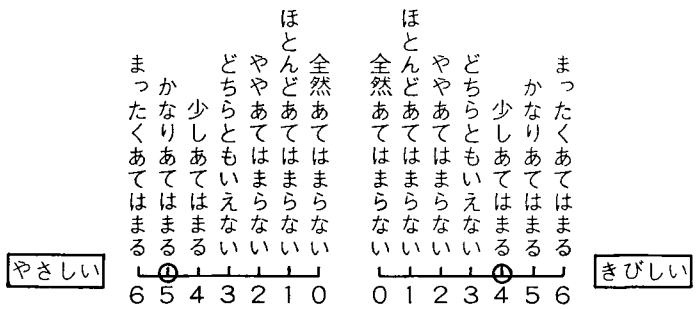

Fig. 1 測定形式

しかし，いくつかの示唆は得られたものの，これらの結果を裏づける理論については未だ不十分である。新たな“二面性”に対する理論の構築は，今後の課題として残されている。

2. 内省報告をもとにした二面性に対する考察

ここでは“二面性”についてより基本的な考察を加えるため，1. とはまた異なった面からの

アプローチを試みてみたい。そのため筆者は以下に述べるような手続きに従って，“二面性”に関する被験者自身の感想・意見を収集することにした。これは，テストによって得られたデータのみによって検討されてきたこれまでの研究では，ぬけおちてきたと考えられる被験者の“生の”声を聞くことによって，これまでの研究結果を補おうとするものである。

手続：まず，TSPS を京都大学大学生（教養部）279名（男 244 女 35）に対して実施，その後，このテストをうけた感想及び意見をレポート用紙1枚程度に自由記述させた。その際，スコアについても被験者自身に算出を求めた。（テストが何を測定しようとしているかについては，何も伝えていない。）

このようにして得られた記述の中には，“二面性”に関することだけではなく，PとNについてや，問いが形容詞であることについて，さらには質問紙法そのものについての意見もみられた。しかし，ここでは，その中から“二面性”に関する意見のみをとりあげて検討することとする。

①“二面性”の成立

TSPS は，相反する対の双方について評定するという形式をもっているために，被験者は否応なく“二面性”ということに対峙させられるらしい。その際，自己の“二面性”について被験者はどのようにうけとっているのだろうか。まず“二面性”の成立について述べている例を引用してみよう。

㋐左右は一見全く対照のようだが，いざ答える時になると，こんな場合はこうだ，あんな場合はこうだと考えていると全く対照ではなくなるのでおもしろい。

㋑時と場合によって物事に対処する仕方がかなり異なると思ったため，両方あてはまった。

㋒表むきの自分，内側の自分と考えていくと，どの言葉も大なり小なりあてはまっているようだ。

㋓2つの面がある。これは社会集団に対する恐怖が生みだした1つの自分なりの解決法。

㋔両方にあてはまることがあった。とはいっても，同時に現われるのではない。

㋕両方にあてはまった理由は，①日によって気分が変わりやすく，それによって性格もある程度変わるから。②過去の性格と現在のそれがごちゃまぜになっている。③普通の人間として当然のこと。

㋖人の性格とははっきりわりきれるものではなく，両方につけることがあっても不思議とは感じない。

㋗人間の性格は対照的な要素を矛盾なくもてる。個人に対する環境，内的要素などによってどちらかが大きく表面にあらわれることがあっても本質的には2つは存在する。

㋘自分の事を考えてみると，多重の人格が，時によって交代することもあるが，多くの場合常に共存していて，時には自分のとるべき道を正反対の2方向へ同時に導く。

これらは，“二面性”の存在を意識し，うけいれているもののうちで“二面性”が成立する経緯について触れている代表的な例をあげたものである。

“二面性”の成立ということを考えるにあたっては2つの方向性が考えられる。1つは，外的条件であり，他方は内的条件である。外的条件というのは㋑でいう‘時と場合’あるいは㋒でいう‘表むきの自分と内側の自分’などというもので，他者あるいは環境と自己との関わりの中で，生まれてくるものと考えられる。㋒でとらえている“二面性”というのは土居（1976）のいう

“オモテとウラ”に近いかもしれない。㊀の意見などをみると“二面性”は適応のための一手段として生じていることがうかがわれる。次に，内的条件というのは，“二面性”が，他との関わりではなく，もともと備わったものというとらえ方である。㋕の③，㋖などには‘人間の性格とはわりきれるものではない’という意見が述べられ，㋗においてはさらに明確にされている。こういった意見はたいへん多く，“二面性”の存在を認めている者の中では，最も多かった意見である。さて，今，外的・内的という2つの方向をあげたが，この2つは不可分に結びついているものであり，“二面性”の萠芽をもった人格がやがて環境からの要請や他者との関わりの中で“二面性”を含んだ人格を成立させていくものであると考えられる。ところで，この“二面性”を㋗のように自覚するうえには，人格が時間という軸のうえに成りたっている事が要因としてあげられる。㋔にもあるように“二面性”は全く同時にあらわれるよりはむしろ時を移して生じるが，人格が時間をこえてその統一性を保つものであるために，矛盾しているとはとらえながらも，いずれもが自己の中に存在するということを許容できるのであろう。（㋕の②）ただ，㋖のような場合には，時を移さず“二面性”が同時に共在していると考えられ，こういった可能性についても否定できないことが示された。

②“二面性”に対するとまどい

①においては，人格の“二面性”についてその存在を認め，うけいれているとみなされる例をあげたが，意見の中には“二面性”の存在を認めながらも，それに対するとまどいを訴えるものや，存在の事実すら否定しようとするものもみられた。たとえば，

㊁両方にあてはまったりして，自分に疑問を感じたくなるような矛盾が所々みられた。

㊃左右で相反するような答もずいぶんあると思うが，分裂症と思われないか心配。

こういった意見では，両方につけてしまったものの，その事実を受け入れ難いと感じている様子がうかがえる。さらに，

㊄全く反対の意味で使われている言葉に両方あてはまったりしていささかショックをうけた。

など，かなりの動揺をうけたことが示されている例もある。そして，そういったとまどいを解決する方法として，‘実は対が反対だということ自体が誤っているのではないか’（対が反対でないのなら，両方につけたとしてもおかしくはない）というように考えて，自らの整合性を保とうとする例もみられた。

㊅相反しないと思われる対があったので，そのため両方あてはまったりするものがでてきてしまった。

これらの例では，“二面性”を示すということを‘どうもおかしい’こととしてとらえているようである。先にあげた“二面性”を受け入れている意見と，これら受け入れ難いとしている意見とは，ほぼ同数存在している。（‘両方につけた’ということを明記しているもののうちで，受けいれていると判断されるもの60名，受け入れ難いとしていると判断されるもの62名である。）

さて，こうした“二面性”に対する抵抗はどういったところから生じてくるのであろうか。まず第一に考えられる事柄は，人格の統合性を保つために人はあらゆる矛盾をとりのぞこうとするということである。‘人格は1つのものである’というとらえ方は，筆者の考えていたよりもはるかに強く根ざしているものであるらしい。

㊆左と右が矛盾しないように……と無意識のうちに思う。そのため，左右を独立してとらえる

ことはできない。

こういった例では，二面的につけないよう，ふみとどまっているとでもいった感じであり，多くの意見が‘左右の評点の和が6になることが理想である’と述べていた。

こうして，‘人格は1つである’といういわば“構え”のようなものが存在しているところへ，このテストが放りこまれたことによって被験者は“振動”をおこされてそれに対する対応として上記のような意見がおこってきたものと思われる。従来の，例えば，長島ら（1965）の作成した Self-Differential の場合などでは，対語は，たとえば‘清潔な—不潔な’といったものであって，被験者はどちらかだけを選択することが割合容易であった。ところが TSPS の対は望ましさの程度に統制が加えられていることも手伝って，対の双方につけやすくなっている。いわば，対自身のもつ特徴によって“二面性”をひきだしやすくなっており，そのために被験者としては‘普段意識していないところ’に手探りをいれられて，生のかたちのまま放りだしてしまったような印象をもつものもいるのではないだろうか。むしろ“感情的”とでもいえるような，“二面性”に対する抵抗を示す意見をみると，そういった可能性も考えさせられる。

③“二面性”に対するとらえ方の違い

これまでいくつか示してきた例でも明らかなように，“二面性”ということに対する受けとり方は，人によって様々である。他の質問紙法による性格検査（例えば Y-G テストなど）では，これほどの差は認められないであろう。これは，TSPS が，ロールシャッハテストにおける図版のように，ある刺激となって，被験者によって様々な反応をひきおこしたと考えられ，その反応パターンを分析することは意味のあることだと思われる。被験者の中には“二面性”（両方につけた）について全く言及していないものも存在する。また，言及はしていないがどうもひっかかりを感ずるという者もいる。そこで，そうした意見もすべて含めて全体を反応パターンによって分類することを試みてみた。その際“二面性”をどの程度受け入れているかという基準に従って段階づけを行なった。これを Table 1 に示す。Ⅰ段階は，このテストを受ける以前から“二面性”の存在を考えていたというもの，Ⅱ段階は，テストをして初めて気づいたとしながらもそれを受け入れているもの（“なるほど”といった感じ），Ⅲ段階は，とまどいを訴えるもの（“どうしよう”），Ⅳ段階は，どうもおかしいと考えているもの（“へんだ”）である。ⅠからⅣまではいずれも‘対の両方にあてはまる’すなわち，二面的につけた事に気づいていることを該当条件に加えてある。それに対してⅤ段階では，結果的に二面的にはつけなかったが‘あぶなかった’あるいは‘困ってしまった’とするものである。Ⅵ段階では，つけ方についての言及はないのだが，“二面性”との関連性がうかがえるようなものをあげてある。Ⅶ段階は，一切言及のないもの，Ⅷは，不明なものである。Table 1 では，それぞれにあてはまると考えられる意見の例を種類別にまとめて示し，また，それぞれの該当数，及び本文中における例がどれにあてはまるかについてもあわせて示した。

さて，こういったとらえ方の違いはいったいどこから生じてくるのであろうか。ⅠからⅦ段階を通してみると，そこにはまず，自己の“二面性”に対してどの程度意識しているかという差が認められる。Ⅰ段階では，TSPS をうける以前から自己の“二面性”に対する認知がみられ，Ⅱ段階においても，うすうすは感じていたという程度の意識性は認められる。Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ段階においても，“二面性”に対する受けとり方は異なるものの，改めて自己の“二面性”を意識し

Table 1　二面性に対するとらえ方の諸段階

諸　段　階	本文中例	該当数	( )%
I．TSPS を実施する以前から二面性の存在を考えていたとするもの		14	(5)
a．人間はもともと誰でも二面性をもつものである。	㋕	3	
b．このテスト形式はすぐれている。		5	
c．自分は特に二面性の傾向が強い。普段からそう思っていた	㋖	6	
II．TSPS 実施後二面性の存在に気がついたがそれを受けいれているもの		46	(16.5)
a．やってみたら両方にあてはまることがあった。しかしそれが普通なのではないか。人間とはそんなもの。それがおもしろかった。(その他二面性を認めるような理由づけをしているもの)	㋐㋑㋒	29	
b．差が少ないことが性格の対極性（両面性）を示すのだろう。		7	
c．自分の中に相反するものの共存していることを自覚させられた。		10	
III．二面的につけた事に気づき，その事に対してとまどいを訴えているもの		31	(11.1)
a．自分にはAというところもあるがĀというところもある。(矛盾した感じ)		5	
b．対語は反対のはずなのに，やってみると両方あてはまったりあてはまらなかったりすることがあった。		8	
c．反対のはずなのに両方にあてはまってしまった。これは，自分の性格がどっちつかずだから。自分は矛盾しているように感じた。(理由づけはしているが，受けいれているとは思えず，別の面からの理由づけをしたり，当惑が先に立っているもの)	㋔㋕	18	
IV．二面的につけた事に気づき，それをどうもおかしいと考えているもの		31	(11.1)
a．理想的には（元来）片方がかなりあてはまるなら他方はほとんどあてはまらないとなるはずなのにそうならなかった。(どうも変だ)(理由づけをしていても対のせいにしていたりなど)	㋗	15	
b．矛盾した結果になっている。へんな結果だ。ショックだ。	㋘	6	
c．矛盾した結果になる。それで仕方なく，どれも“どちらともいえない”につけてしまうことになった。		10	
V．二面的につけかけてあぶなかった。ふみとどまった，困ったもの		24	(8.6)
a．左右の語を独立に考えて答えるのが難しく，統一を保たせようという意識が働いた。	㋙	15	
b．両方ともあてはまると思うものもあったので，どう答えればよいのかわからなかった。答えにくかった。		9	
VI．明確には言及していないが，何らかのコメントを加えているもの		46	(16.5)
a．全然わからないが，真実の私に近い結果がでたように思う。こういう形式は初めてだが，おもしろかった。スラスラかけた。		4	
b．どこにマルをつけてもウソになる。(どんどん新たな自分の点がでてくる。自分とはまるで正反対のように答えたい誘惑にかられる。理想像が入ってしまう)		26	
c．差が0になる時どう考えればよいのかわからない。		4	
d．ほとんどが“どちらともいえない”になった。		8	
e．とまどった。		4	
VII．言及なし		82	(29.4)
VIII．言及しているものの，意味が今一つはっきりせず不明なもの		5	(1.8)
		計 279	(100)%

たという点はII段階と同様である。それに対し，VI，VII段階においては“二面性”に対する意識化がなされていないことが推量される。こうしてみてくると“二面性”に対してそれをどの程度意識化しているかという点で相当個人差が生じていることがわかる。また，II，III，IV，V段階の差異は，“二面性”に対して，どちらかというと，よい—悪いという次元でとらえた評価の違いと考えられる。これは，‘人格は1つである’という“構え”と，二面的につけたということとの葛藤状況の中で，どのような解決方法をとったかという差異を示しているといえる。ところで，この解決方法の中で，IV段階の c. にみられるような‘矛盾した結果になるので仕方なく“どちらともいえない”につけた。’という方法は，注意しておくべきものだと思われる。スコアの上では，こういった人たちは，S_- が0に近く，S_+ もそれほど大きくも小さくもないので，“二面的”ととらえられるものと思われるが，実際には“二面性”からは“逃避”しようとしていると考えられるからである。こうして1つずつみていくと，同じスコアを示すものでもその意味が異なってくる可能性を考慮にいれねばならないだろう。また，二面性スコアと，Table 1 における段階とは，どういう関係にあるのだろうか。対応しているのだろうか。こういった点に解答をだすために，これらの意見とスコアとの関係を分析することが大変重要な問題となってくるが，この点は今後の課題として検討していきたい。

④“二面性”のモデル

これまでみてきたように，“二面性”に対するとらえ方には，かなりの個人差が存在している。ある人にとっては‘あたりまえ’のことであり，またある人にとっては‘許し難いこと’なのである。ところで，‘あたりまえ’としている人にとっても，また別の新たな対立に対してはどう感じるだろうか。その人たちにとっても，受けいれることのできない対立と向かいあう時は訪れるのではないだろうか。悩み，受けいれ，そしてまた悩んでいくといった動的な観点から“二面性”についてもとらえるべきだと思われる。2つの異なった極，対極は，必ずエネルギーを生む。また，エネルギーをもった生きた人間の中でこそ，“二面性”は存在しうるものであろう。

“二面性”がいかにして人格内に存在しうるかという点について考える場合においても，こういった dynamic な視点からとらえようとすると，それを1つのモデルとして示すことは大変にむずかしいことだと思われる。それは，Rubin の盃と横顔の図で，図と地とがちらちらと反転しながら浮かびあがってくるようなものと似ているのかもしれない。あるいは，1つの中心的なもののまわりを，様々な，対立性も含んだ要素がめぐっていて，時に応じて使いわけているのかもしれない。あるいはもっと別のイメージでとらえるべきなのかもしれない。

3. これからの課題

これまで，“二面性”ということに関して様々な方向からのアプローチを試みてきたわけであるが，疑問は尽きない。例えば，同じように“二面性”をもつととらえられるものでも様々な様態をもつのではないか。——安定した“二面性”もあれば，不安定なものもあるだろう。“二面性”がアンビヴァレンスといった状態にあるものと，対立を含んでかつ統合されているものというのもあるだろう。（これらは対立をそのまま含んでいるという点に関しては共通しているわけだが，どこが異なっているのか）——また，適応ということを考えた時には，一面的であること，二面的であることは，それぞれどのようにとらえられるのか，など。こういった課題に対

して，今後少しずつ取り組んでいきたいと考えている。

ま と め

人格内の対極的な側面である“二面性”について，まず，①既存の類似概念との異同，②人格理論における位置づけ，③測定分野における類似の観点，④筆者の作成した質問紙（TSPS）によるアプローチという点について順に述べ，これまでの“二面性”研究に対する概観をおこなった。これを通して，“二面性”に関する理論的裏づけをめざしたわけであるが，TSPS で得られた結果を裏づけるような理論については，なお今後の課題として残されることになった。そこで，この課題を解決する一助として，これまでとは異なる方向からのアプローチを試みることとし，被験者自身の声である，TSPS を実施した際の内省報告について分析を行なった。分析は①“二面性”の成立，②“二面性”に対するとまどい，③“二面性”に対するとらえ方の諸段階といった観点から，内省報告をもとに論が進められ，“二面性”の成立について外的・内的の2方向から推論し，また，TSPS に対する対応について個人差が認められることが明らかにされた。スコアと，このとらえ方の段階との関係については，今後検討されることとなった。次に，④“二面性”のモデルについても検討されたが，動的状態の中でとらえるべき“二面性”について静的モデルで語ることの難しさが述べられた。最後に，主に“二面性”の様態，及び適応との関係といった点に関しての疑問が，今後の課題として述べられた。

注

1) 従来の方法——例えば Self-Differential（長島ら1965）——においても，“やさしい”“きびしい”のうちのどちらかのみを選択することにはなっていない。しかしその際には，“やさしい”に“5”の評定をつけると自動的に“きびしい”は“1”であることが規定されており，Fig. 1 のようなつけ方をすることはできない。

2) これらの結果については以下の文献を参照されたい。：森（1983），桑原（1980，1981a，1981b），森（1982a，1982b）

引 用 文 献

Apfelbach, H. 1924 *Der Aufbau des Charakters.*（高良武久 1953 性格学 白揚社による）

Bem, S. L. 1974 The measurement of Psychological Androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.

Bleuler, E. 1911 Dementia praecox oder Gruppe der Schizophrenien, in Handbuch der Psychiatrie, Herg von G. Aschaffenburg. Spezieller Teil 4 Abteilung, 1 Hälfte. Franz Deuticke, Leipzig-Wien.（邦訳：飯田・下坂・保崎・安永（訳）1974 早発性痴呆または精神分裂病群 医学書院）

土居健郎 1976 オモテとウラの精神病理 荻野恒一(編) 分裂病の精神病理4 東京大学出版会 1—20.

Jung, C. G. 1921 *Psychologische Typen.* 14. Auflage 1981 Gesammelte Werke, Bd. 6. Walter-Verlag.

桑原知子 1980 質問紙法による人格の二面性測定の試みと検証 日本教育心理学会第22回総会論文集，598—599.

桑原知子 1981a 人格の二面性測定の試み(3)——NEGATIVE 語を加えて 日本心理学会第23回総会論文集，528—529.

桑原知子 1981b 人格の二面性測定の試み(4)——スコアの示すパーソナリティーについて 日本心理学会第45回大会発表論文集，557.

Maslow, A. H. 1962 *Toward a psychology of being*. New York: Van Nostrand. (邦訳：上田吉一（訳） 1964 完全なる人間 誠信書房)

森 知子 1982 a 人格の二面性測定の試み(5)——不安との関係について 日本心理学会第46回大会予稿集，309.

森 知子 1982 b 人格の二面性測定の試み(6)——YG. MMPI との関連について 日本教育心理学会第24回総会発表論文集，416—417.

森 知子 1983 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究，54，182—188.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕三・堀 洋道 1965 自我と適応の関係についての研究(1)——Self-Differential 作製の試み——東京教育大学教育学部紀要，12，85—91.

岡本重雄 1960 現代心理学概論 朝倉書店

Rorschach, H. 1921 *Psychodiagnostik*. Bern: Ernst Bircher. (邦訳：東京ロールシャッハ研究会（訳） 1969 精神診断学 牧書店)

上田吉一 1969 精神的に健康な人間 川島書店

Weininger, O. 1924 *Geschlecht und Charakter* (邦訳：村上啓夫（訳）性と性格 春秋社)

（本研究科博士後期課程）